

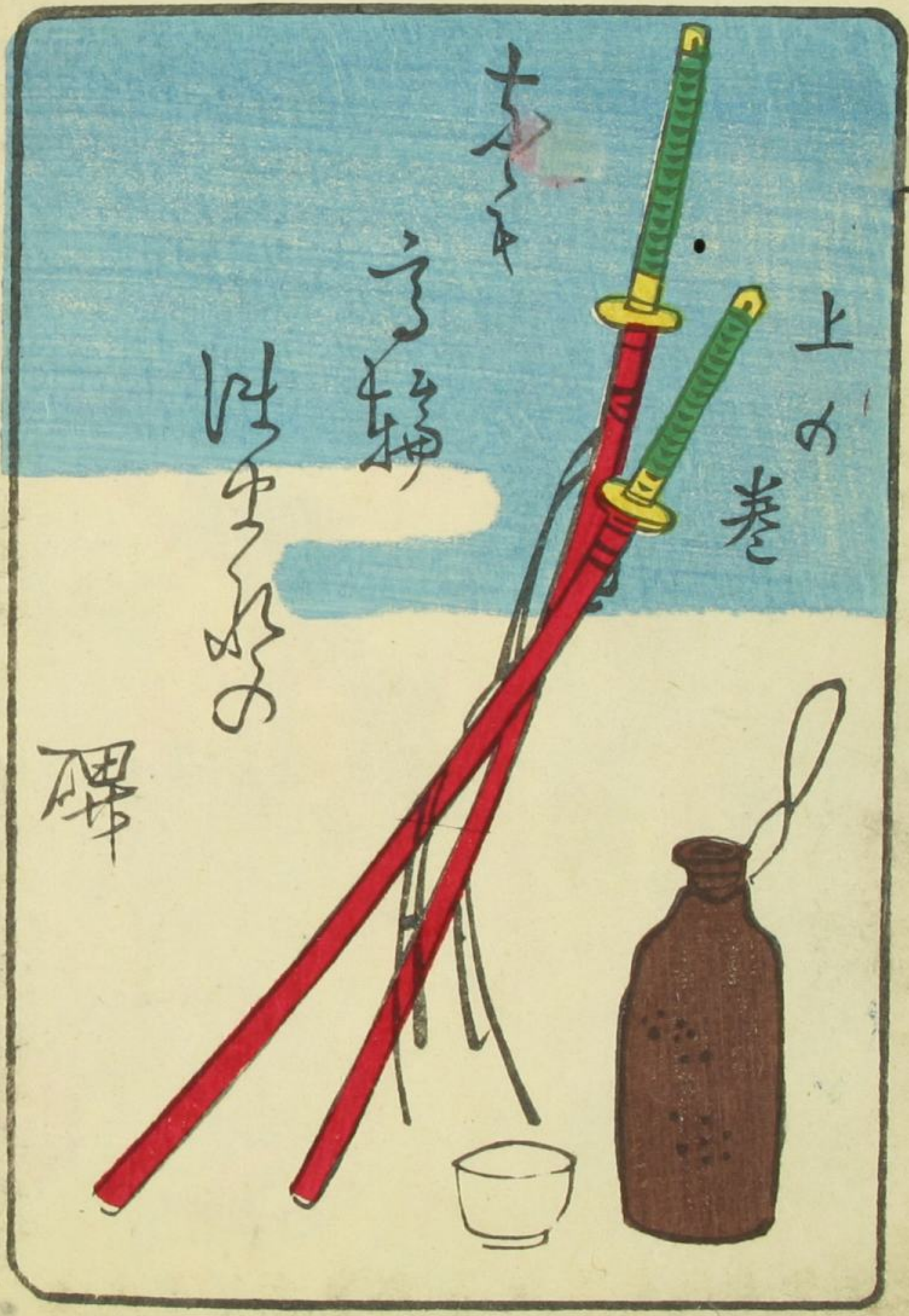


春亭史彦編  
梅堂國政画

金永堂壽梓

上





<98-8407>

夫忠孝の全うつと往古よりて云ひせよとせど爰小物さし  
 一冊の大打童児の御存の其名の高き高輪今中  
 墳墓で残る赤穂義黨の其中めて二世小三度の  
 報讐小忠孝とて全く世堀部安兵衛武康が舊き事跡と  
 新し梓小あつて櫻板小花咲春の御評判高田の  
 馬場小半が尾と引や霞の永き日の御退屈と防の御眠  
 気覚の讀切本金永堂が應需其伏小序交換てかの如

明治十四年十月

春亭史彦





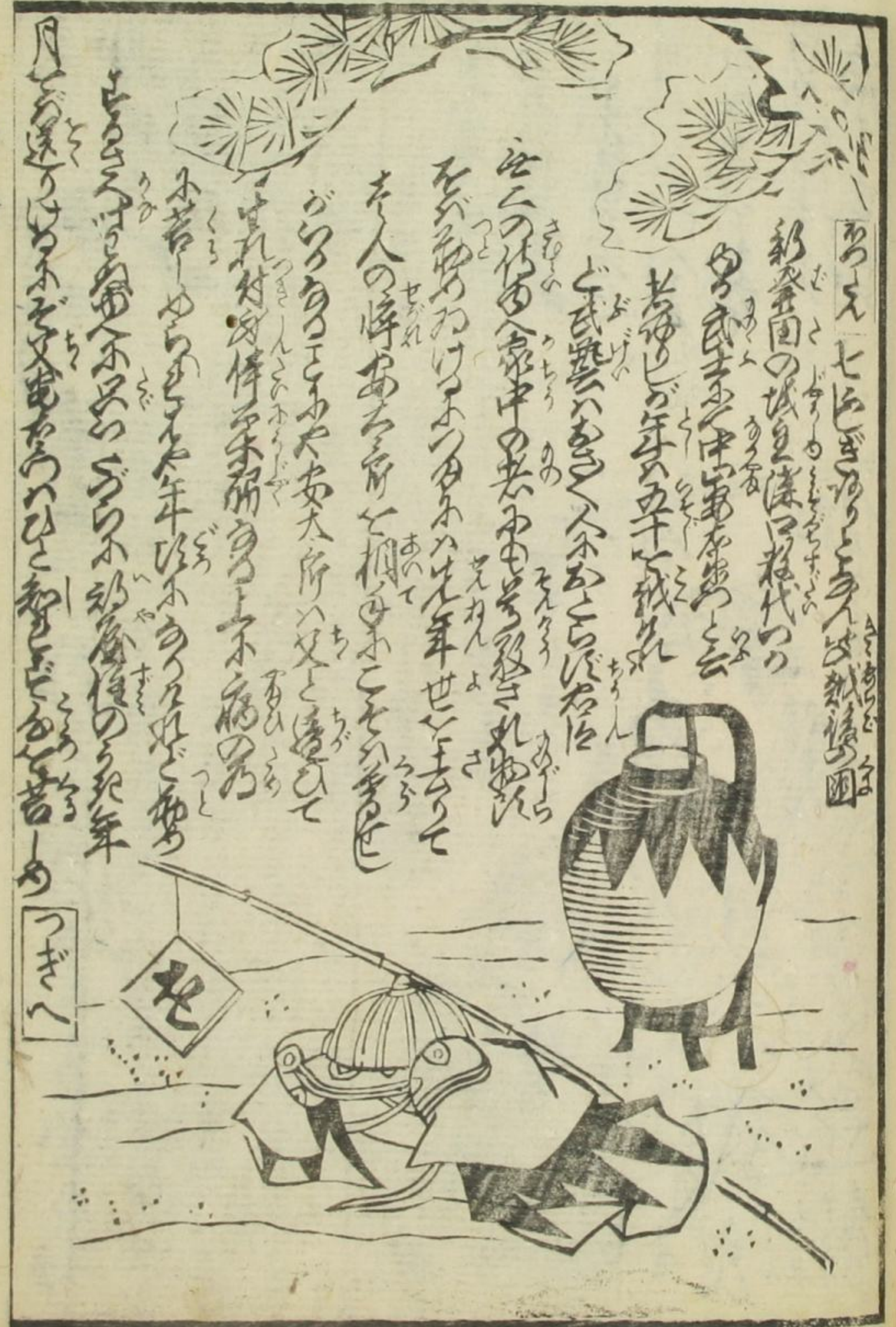
鎗術指南の浪人  
中津川祐伴

安兵衛の伯父  
菅野六郎五郎



演習者  
村上庄九衛門

同村上が弟  
同苗三郎五郎





〇山車

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大



必すの事なりとてこれにたがふ事

自慢の事もは

足らぬと申すは

法入るを安ん

所の事を申

まの事今日

汗をぬく事

が事いふ事

いふ事いふ事

いふ事いふ事



〇山車

中山大

中山大

中山大

中山大

中山大

〇山車とて安太郎何者かとて内からせりし  
 押入て今来た者か別れはしりてか  
 〇山車とて安太郎何者かとて内からせりし  
 押入て今来た者か別れはしりてか

つぎ安太郎  
室敷我々  
帳と云えん  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては



△あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては  
あつては

目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録



目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録  
目録

又の言葉の通りまんとちのめふさるぐ  
 後合ま心のもをさうくあけり初と申初  
 用世世重双方かたせむて替  
 礼まるはあふつめをさるはまよと  
 ちけりの子も具と老翁の衣程とて  
 宿小はをを屋とち青の酒りの決と紙  
 幸ひ小窓内の老の床入とる海とて人の  
 ちそち秋遠とて玉形とては城下のまづき  
 つみね後接後接ももあつしまつめを西のお  
 り心知り申さ去りける夜明と初と初より申  
 門たひお夢た伴う不きと伴う一旦初せ海徒と  
 菅野と云ははほき伴う不おあると無る悔らち  
 歎息思とてあふあふ不定の涙お異はけが初くて  
 りの言とていふと先安を所ら初小窓かひるをよと



口松子云  
 い御小語りて  
 御入あどいあをの  
 中あのみと何い

あれ事あつちの因と  
 推察さ裏小気の毒さあふう  
 中あはれ中  
 木の二とあ  
 一皮は士  
 が始せとて

あはれ事あつちの因と  
 推察さ裏小気の毒さあふう  
 中あはれ中  
 木の二とあ  
 一皮は士  
 が始せとて

あはれ事あつちの因と  
 推察さ裏小気の毒さあふう  
 中あはれ中  
 木の二とあ  
 一皮は士  
 が始せとて



あはれ事あつちの因と  
 推察さ裏小気の毒さあふう  
 中あはれ中  
 木の二とあ  
 一皮は士  
 が始せとて





つぎ ちかひの家の父の  
 行く安らふてお給ひて  
 仕へるに貞女あり  
 まのねを我家とて  
 けふもいと家お世  
 役あそぶ所へゆく  
 城へておき一戸今  
 おもが初るお世  
 身の流付はけきと元  
 白世無事とてお世  
 送るに之はねお世  
 おもがはるれ 優そこの  
 ねとわとてお世



目へのけむりも  
 たつらも  
 矢もつらも  
 光陰の疾く  
 そのじゆも  
 返り朝も  
 まよむも  
 が精原丸  
 とのふり  
 けつら  
 いをゆりんと  
 めひのあらと



△おとこ男  
 せよけ  
 がおを所  
 ひも  
 と名  
 ちかひ





一 丑 美談 三冊  
三 雙 仇 誼 讀 切  
名 高 輪 卷 礪  
吉 田 北 山 著  
吉 田 北 山 著



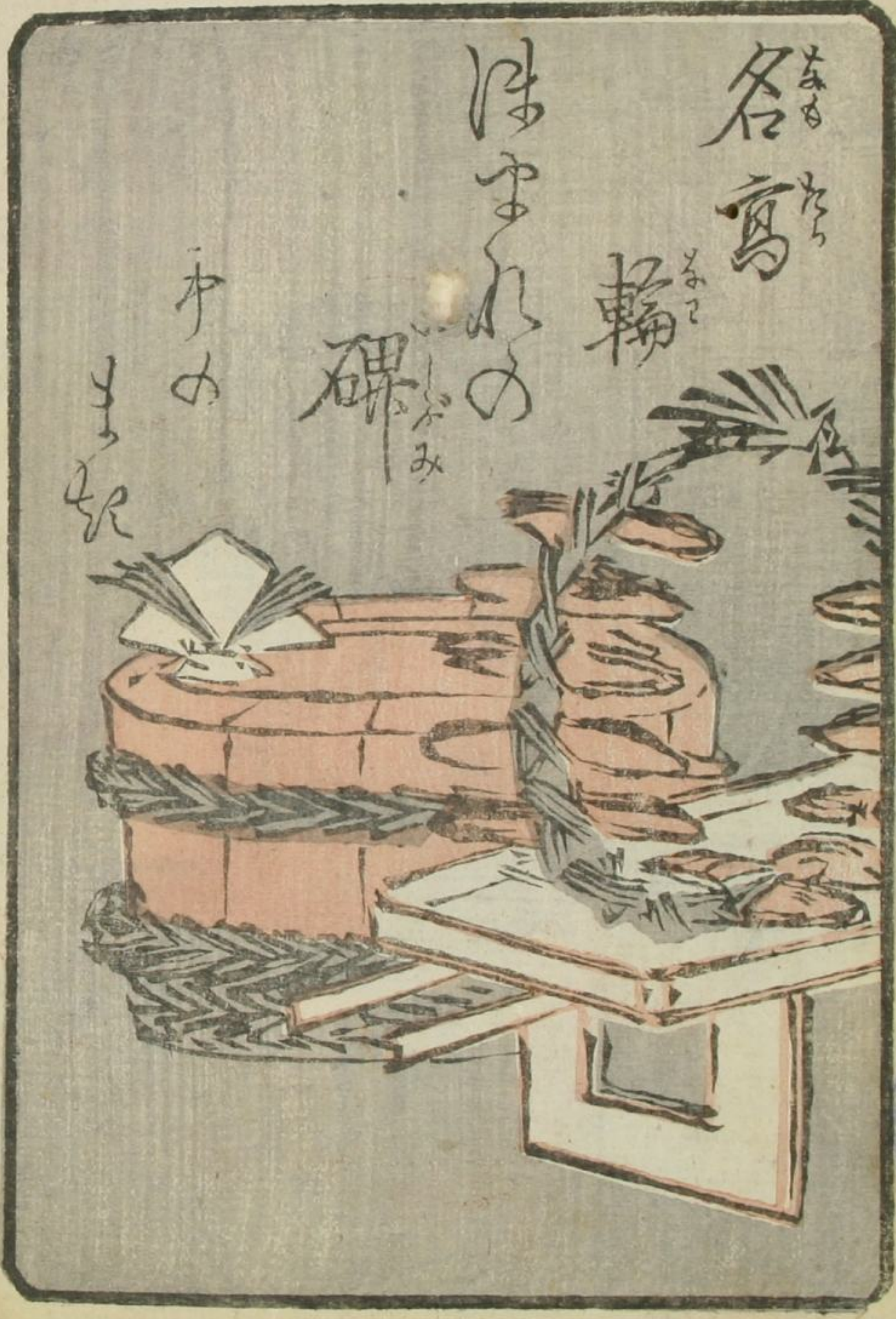


伝ふも小御本づらの田向もよとらさるる辰のふと△  
 の体小安まき共初はねものひひ

伝ふも小御本づらの田向もよとらさるる辰のふと△  
 の体小安まき共初はねものひひ

伝ふも小御本づらの田向もよとらさるる辰のふと△  
 の体小安まき共初はねものひひ

伝ふも小御本づらの田向もよとらさるる辰のふと△  
 の体小安まき共初はねものひひ



伝ふも小御本づらの田向もよとらさるる辰のふと△  
 の体小安まき共初はねものひひ

伝ふも小御本づらの田向もよとらさるる辰のふと△  
 の体小安まき共初はねものひひ

伝ふも小御本づらの田向もよとらさるる辰のふと△  
 の体小安まき共初はねものひひ



同いそとつひと大勢  
 安のむんせんとつひと  
 ろんけまの人あまらさ  
 ばののさんせんとつひと  
 多様とせむそのさるお流るる  
 将校とすつあつと花あつと  
 後と廻つた葉のちのちのひさ  
 同いそとつひと大勢

安のむんせんとつひと  
 ろんけまの人あまらさ  
 ばののさんせんとつひと  
 多様とせむそのさるお流るる  
 将校とすつあつと花あつと  
 後と廻つた葉のちのちのひさ



連るる流るる侍ひつとつひと  
 味あつとあつとあつと  
 おほひつとつひとつひと  
 安右とつひとつひと  
 侍とつひとつひとつひと  
 安右とつひとつひと  
 侍とつひとつひとつひと  
 安右とつひとつひと  
 侍とつひとつひとつひと

安のむんせんとつひと  
 ろんけまの人あまらさ  
 ばののさんせんとつひと  
 多様とせむそのさるお流るる  
 将校とすつあつと花あつと  
 後と廻つた葉のちのちのひさ

さらさらの髪をよわするは  
もはげしき髪をよわするは  
髪をよわするは  
髪をよわするは  
髪をよわするは

髪をよわするは  
髪をよわするは  
髪をよわするは  
髪をよわするは  
髪をよわするは



礼述... 善の安... びん...

高車... 善の安...



高車... 善の安... びん...



中山氏の墓  
 中山氏は、  
 中山氏の墓に  
 中山氏の墓に  
 中山氏の墓に

別果  
 九年  
 西暦



中山氏の墓に  
 中山氏の墓に  
 中山氏の墓に  
 中山氏の墓に  
 中山氏の墓に

中山氏の墓に  
 中山氏の墓に  
 中山氏の墓に  
 中山氏の墓に



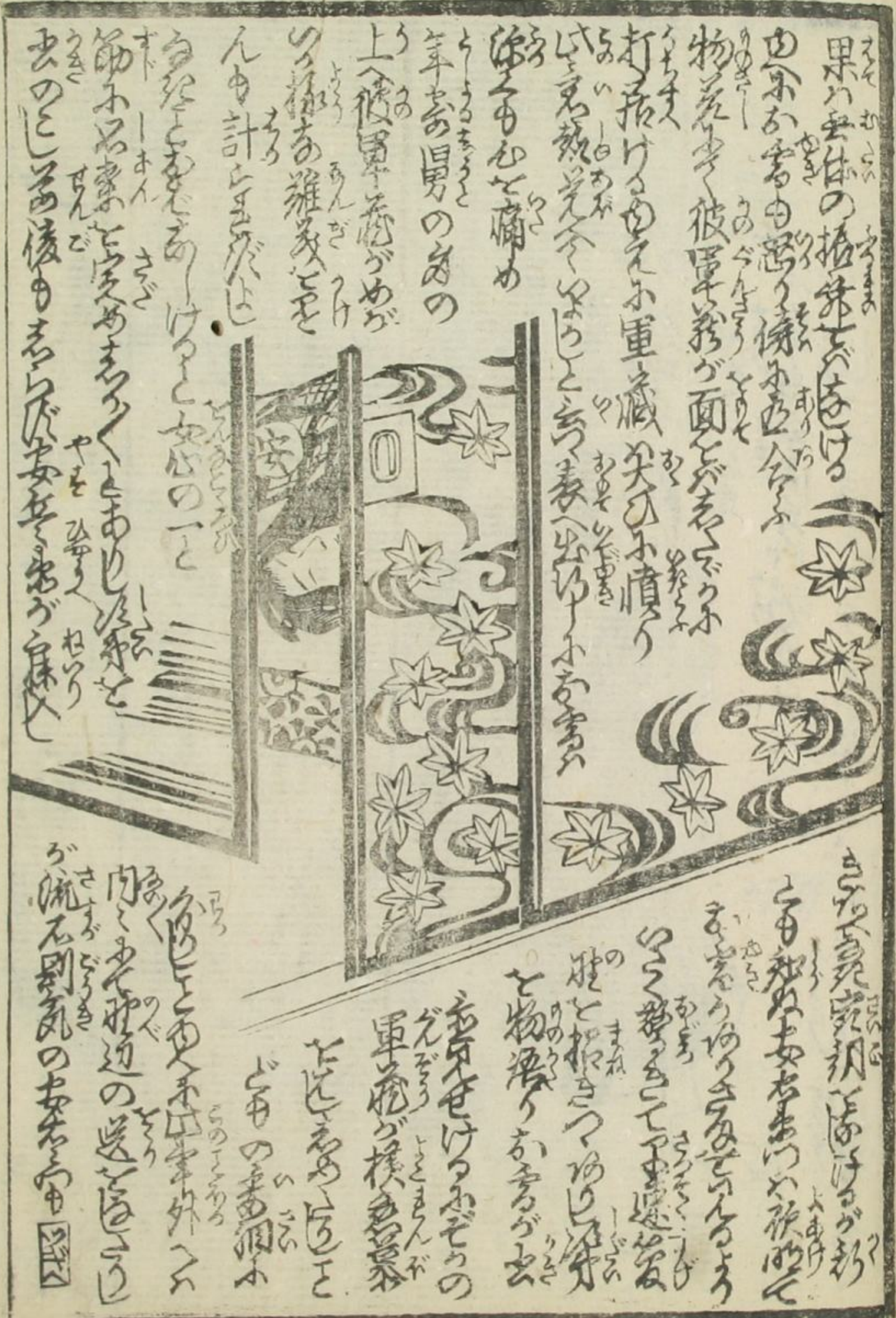






果の世々の極味をばける  
 由小お香の密り候小お合ふ  
 物差をく彼軍が顔とみそくふ  
 打拵ける小軍を滅矢の小楮  
 ける名敷えやうけとさう表へ出ゆ小おま  
 途もむと痛め  
 羊あ男のあめ  
 上へ彼軍が顔とみそくふ  
 の極味をばける  
 んも計とまははは  
 るはとををあけること女のひと  
 節小お香とあまふとあり候  
 去のじさ後もちらび女をばける

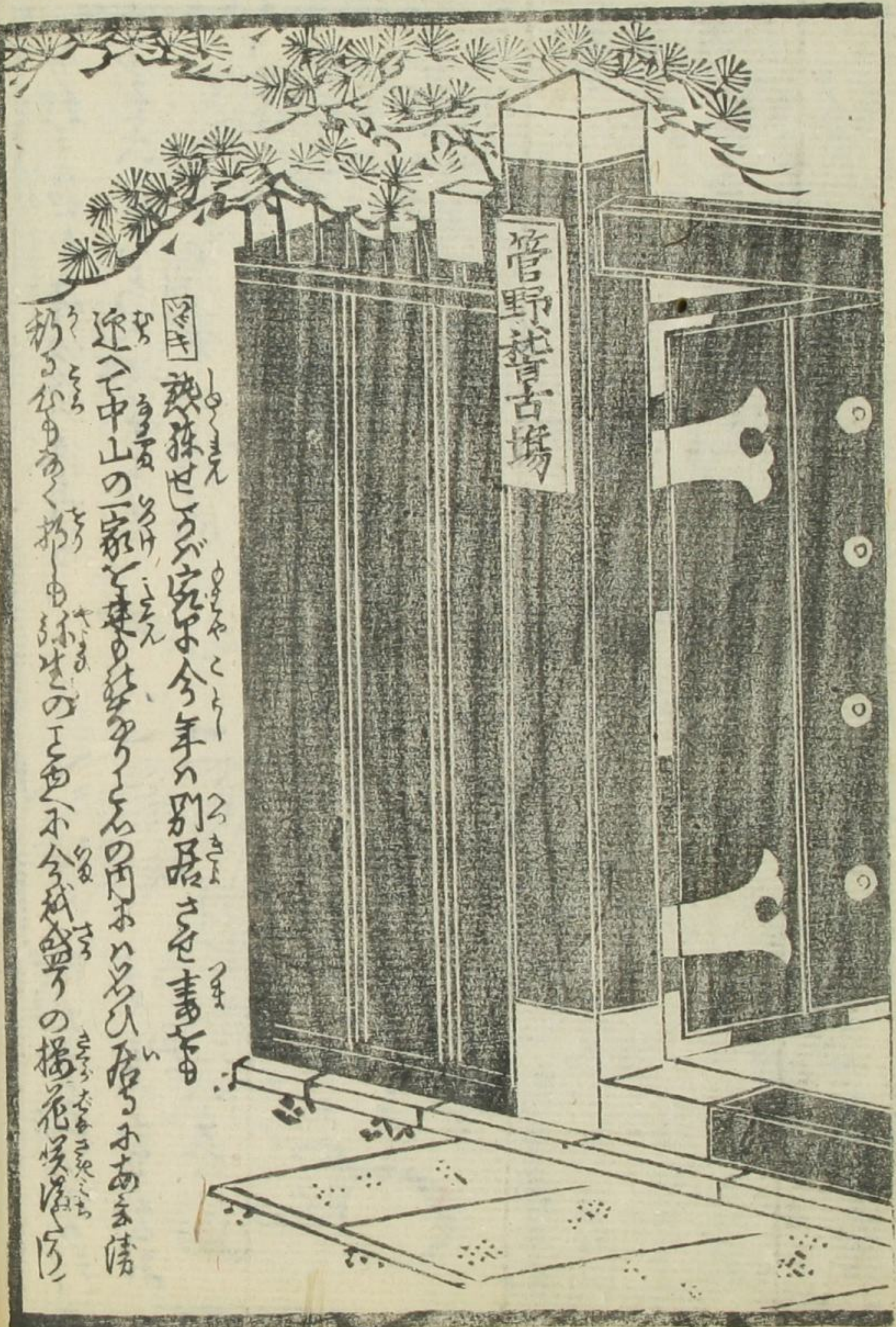
撫子とくと打油とつるさ  
 小お目  
 眼も曇  
 か中消へ  
 涙と小目  
 ぼくがふん  
 懐と  
 抱を  
 扱よ  
 王  
 く我と我が目ととと更  
 さやあは初はほひかか  
 とおぬ女をまの秋ゆ  
 まさうゆりふらとんか  
 のちもてとととと  
 物と抱きつゆり  
 と物差をくさるが  
 ちをせけるあそこの  
 軍が顔とみそくふ  
 とととととととと  
 小おの  
 かとととととととと  
 内く老せ道の送と  
 が流石別苑の女を



果の世々の極味をばける  
 由小お香の密り候小お合ふ  
 物差をく彼軍が顔とみそくふ  
 打拵ける小軍を滅矢の小楮  
 ける名敷えやうけとさう表へ出ゆ小おま  
 途もむと痛め  
 羊あ男のあめ  
 上へ彼軍が顔とみそくふ  
 の極味をばける  
 んも計とまははは  
 るはとををあけること女のひと  
 節小お香とあまふとあり候  
 去のじさ後もちらび女をばける

撫子とくと打油とつるさ  
 小お目  
 眼も曇  
 か中消へ  
 涙と小目  
 ぼくがふん  
 懐と  
 抱を  
 扱よ  
 王  
 く我と我が目ととと更  
 さやあは初はほひかか  
 とおぬ女をまの秋ゆ  
 まさうゆりふらとんか  
 のちもてとととと  
 物と抱きつゆり  
 と物差をくさるが  
 ちをせけるあそこの  
 軍が顔とみそくふ  
 とととととととと  
 小おの  
 かとととととととと  
 内く老せ道の送と  
 が流石別苑の女を





菅野菅古場  
今年の別居をきき  
迎へ中山の家と東のはまの用おひひりあま清  
かむあまのちゆふの工面不念候の掃花候は



風景を眺め人の心只ひこり愛れ  
立出るあち  
とち松歩は  
けるふらりも  
母といふる故  
救軍をたつ海兵  
けんあ年情小端あくをさう  
寤の中板藉あくとまのしるあそ  
あまあまを相ひあまを返り  
過るに真なりとて理をきよ一刀後  
あまの同く一刀後合せ二打三打  
あまの難あく係不軍をたつ切  
あまの連板は伯父六所左衛門  
あまの菅野のころ不候  
あまの使は居いさせ不  
母の仇  
母の仇  
母の仇



新版 小本番數  
新版 開本番數  
色入 小本番數  
此分出版仕  
新版 開本番數  
新版 開本番數  
此分出版仕

新版 大閣記  
新版 大閣記  
上下 大閣記  
追々出版  
追々出版

春史史考綴  
都鳥己志満縁起  
梅堂國政重  
春史史考綴  
戀情縁橋本  
梅堂國政重  
市下三冊純切  
市下三冊純切  
定價七錢重  
定價七錢重

御明治五年月 日 奉  
東京本所區水所電澤田志目甘其米地  
板元 金 永堂 水 屋 孝 助





卷の

名

高

輪

下之卷

巳

夏乃

分婦



中巻

おて八丁橋の  
おて八丁橋の  
おて八丁橋の

橋一所乃傷と出せし目  
入門多しゆりてぬち  
冒かおける  
数取軍を  
せぬ小それと

國を  
法國を

法國を  
法國を

高輪

小面會  
小面會  
小面會

の  
立者  
熟練  
先國  
元  
りて  
小面會  
小面會  
小面會



越後新発田

立寄り伯父の方へ  
 尋ね小笠野小笠原が余の  
 住居と暫くしてありけり  
 何せやとを海を  
 管野がとを問ひ  
 けまの道に分る  
 くと素細小笠原の  
 時を江戸にて  
 叔母を去て致しとあるはつと云ふ  
 小笠原を南大の小笠原を去て云  
 江戸に於きつと云ふ尋ねぬ  
 小笠原を去るに小笠原野中



三  
二  
一

譲りて其の身は  
 小笠原の西屋を  
 引取り河村和吉  
 と致せ小笠原野中  
 の舞より一刀流の  
 南屋村上を去る  
 上吉野



帰峯鶴家  
 日高見

大い小笠原は  
 小笠原止め代替言ふ  
 肉松平大京大吏との  
 使者と云ふ後野は  
 難い事なり  
 故に常事なり  
 難い事なり

有らば野中  
 小笠原野中  
 無小

五月の家中  
 後野の方へ  
 入するあり  
 小笠原野中  
 小笠原の吉例  
 此を毎年八月  
 後野の方へ  
 小笠原野中  
 小笠原野中  
 小笠原野中

家の中の家老  
をいぢりぢり係  
多し者子のほら  
金小付は金切切  
皆と海に逃げた  
おのれは面白  
おのれは面白  
おのれは面白



六  
おのれは面白  
おのれは面白  
おのれは面白

二ツ小切割て  
おのれは面白  
おのれは面白  
おのれは面白

おのれは面白  
おのれは面白  
おのれは面白  
おのれは面白



つゞきて  
 平伏せし大守の夫とむ付られ  
 二人のまゝとされぬの度面自

中津川祐乾  
 我々の  
 安  
 斯ま取辱と蒙り  
 貴士の上は彼奴  
 の貴殿も亦果  
 返る我



と盛天祐とて  
 殿の邊は我家の宿じが  
 村上方の人中  
 考は村上方家中の人々同  
 ありぬ井の三井  
 さ返さんく上  
 村上方の足守と申す夜不泊生家

此助六  
 何事  
 何事  
 何事





園にて中津川祐  
 範門人も訣ち十  
 八人の壯者が未だ  
 打圓して  
 待ける故  
 往來の人  
 何事ぞ  
 と詰るも物  
 の倒るる相  
 ほどをみる  
 小若  
 人ぞ押

堀部娘  
 母は心を静く不支度とて先  
 村より舟とほひ白刃と合  
 せり見舟ゆきを古岸より  
 舟に切せぬとて向ふ所の  
 打太刀四度切られ既  
 小危く見  
 彼の  
 中津  
 川祐  
 範門  
 の  
 相  
 不  
 也



高輪下  
 の  
 村分  
 先下換  
 仕度しを  
 村  
 舟物十八  
 の壯者  
 中津川  
 園にて  
 堀部娘

村  
 舟物十八  
 の壯者  
 中津川  
 園にて  
 堀部娘

野のあまのうま果てん

切符をよむむいふ事

物同の目ぞ中洲小

曇る時雨月夜河の紅葉

ぞあはれありおちあまの自甘はあま

方更りする天佐急ぎまをせありは

体言心は兼主人の仇と切人い

けなげありけきと業業系業のまま

中津川の門分り大勢うろろ丸田八方

はらに切符のふ教あくを物心真の経



色ど家系若野家

船を運ぶふまきの

眼中面をまき

馬場

中入

村克

舟

一人の物

中出雲

引連きて不討見物

白くろふ管野の教へ

る死実初とあつるを全

お人の愛をまきあつらんと

を物も去らばおちるに更敷る

返くえ物押分て取来るま人の

仕人へ別人お遊ばす野のが畑中山

あまの術を康さじつ酒小枝の

おまの術を康さじつ酒小枝の

おまの術を康さじつ酒小枝の

おまの術を康さじつ酒小枝の



お物負

あれと云ふ

村克

おま

娘

と高田の馬場

諸侯のし

おま

おま

おま

おま

何程のこゝろを再び...  
 支度不及ひける元...  
 より七五物...  
 此の...  
 双方...  
 お礼...  
 内...  
 本...  
 一...  
 伊...  
 此...  
 旅...  
 此...



横...  
 此...  
 伏...  
 此...  
 此...  
 此...



此...  
 此...  
 此...  
 此...  
 此...

此...  
 此...  
 此...  
 此...  
 此...  
 此...  
 此...  
 此...  
 此...  
 此...

高論下





010190514019

史彦編 國政画

御届 明治十五年 七月三日

編輯 吉田嘉雄

出版人 関根孝助

日本橋府村松町四番地 画工 竹内栄久

本所区電氣町番丁具三番地

浅草区馬道町字目三番地

後多士の... (vertical text columns)

新版 小本重數

色入

新版 大附重數

上下

追々出版

新版 大附重數

追々出版

春史彦... (vertical text)

梅堂國政画

東京中野區本所電氣町番丁具三番地

板元 金永堂 水屋孝助

7

